国語審議会で、「明治以後の漢字教育は〝読み書き同時教育〟であることに対し、今は、石井方式の〝読み書き分離教育〟を新たに考えるべきである」ことの提案があり、論争が行なわれたという。その詳細について知りたい。

昭和四十四年三月十日の国語審議会で、阿部吉雄委員が石井方式により、幼稚園で幼児が一千字の漢字を読む例を引き合いにして、「漢字は読むことに価値がある。読んだ字は必ず書けるようにするという明治以来の教育方針には疑問がある。漢字を書くのは大きな負担だが、読むのは割り合いにたやすい。書くのはあと回しにして、まず読みの指導をしたらどうか。」という提案をしたのが口火で、白熱的な論戦が展開されたと、朝日・毎日の両紙が大きな見出しで報道しました。

朝日によれば、西尾実委員が反対、「私たちの教育の経験から、この問題はもう解決ずみだ。小学校の低学年では、読み書きを並行して指導しなければ、正確に習得できない。漢字の知識は、一字ずつ覚えていくものではなく、言葉や文章として覚えてこそ身につく。」と、読み書き並行論の正しさを強調したといいます。

賛成者として、日高第四郎委員、「幼稚園の子供は、テレビを見て、だれも教えないのに漢字を覚える。漢字はもはや学校で教えるだけのものではない。テレビなどが漢字を学ぶ教育環境を作っている事実に目を向け、現代にふさわしい指導法を考えるべきではないか。」という意見。

中立論として、西原慶一委員、「明治十九年に当時の森有礼文相が読み書き並行の方針を定めてから、この方式が小、中学校の教育の中に定着したものである。国語教育の根本にかかわることなので、じっくり時間をかけて検討することが必要だ。」と主張。

結局、この論争は決着のつかぬままお預けとなり、一般問題小委員会で、さらに論議を煮つめることになった。……と報道されていました。

この時、朝日新聞では、

「国語審議会がこのような教育の方法論にまで立入って論議したのは初めてだが、この問題には、最近の幼児の知能の発達、一部の幼稚園での漢字教育の試みなどがからんでいる。幼稚園で漢字教育を取入れたのは、幼児はカナより漢字の方が覚えやすいという理論によるもの。

この問題を提唱した石井勲大東文化大講師の実験によると、ある幼稚園で『鳩』という字を『はと』と教え、翌日読ませたら百人中八十五人が

正しく答えられたという。漢字を読ませるだけの教育で、この方式はいま東京、神奈川、和歌山、京都など、約百ヵ所の幼稚園で試みられている。」

と、石井方式についても報道しています。

続いて、朝日新聞は、昭和四十四年四月二十二日、「漢字教育、どちらが有効？」という論争を特集しました。

「幼い子供に、漢字を読ませる教育が盛んに行われている。大阪の幼稚園では、二万人近くの園児がこの教育に加わっている、という。石井勲、大東文化大講師が提唱する、いわゆる〝石井方式〟で、『社会で漢字で書く言葉は、最初から漢字で与えよ。子供には、漢字を読むことは、そんなに苦にならないのだ。』という立場からの教育だ。」

という書き出しで始まって、「現行の読み書き並行論の正しさを主張する西尾実、法大名誉教授、漢字の読み先習論に大きな意義を認める大野晋、学習院大教授、それぞれの意見を紹介しよう。」という前書きがあり。二つの論文が掲載されました。

読み書き並行論　　西尾　実

去る三月十日の国語審議会総会の席上、漢字学習の方法につき、これまで小学校低学年で学習させていたように、読み書き並行して学習させるよりも、読みだけ学習させることにすると、これまでよりもずっと早くたくさん修得させることができるということから、漢字学習の方法を、読みだけに限って漢字を早く数多く修得させるような調査を行うべきだという提案があった。たしかに、近年小学校の児童たちは、入学前に幼稚園や家庭で、文字をたくさんおぼえてくるものが多くなっている。テレビなどで漢字のいくつかをおぼえてくるものもある。もちろん、ただ読むだけでも漢字を多くおぼえているということはけっこうである。しかし、どういう字をどれだけおぼえてくるかということになると、個人差がいちじるしく、修得量もまちまちである。小学校低学年におけることばの学習は、そういう偶然や個人的な知識だけに満足し、それを推進するだけ

“読み”に習熟してから“書き”を学習させる

ではたりない。

漢字が読めるだけではなく、書くこともできるというような学習を基礎にしなくては、漢字の一字一字を確実に認識することもできなければ、その漢字の機能を生かすこともできない。いわゆる形･音･義の統一体としての漢字を学習させるためには、めんどうなようでも読み書き並行の基礎的学習を経験させなくてはならない。

漢字の学習を読み書き並行に進めなくてはならないといっても、それは小学校における入門期における学習のことで、入学以前に、個人的偶然的に漢字を修得してはならないということではない。また、入門期の読み書き並行の基礎学習が終ったのちには、当然、読む学習だけで、読み書き並行学習によって得られるような、形･音･義の統一体としての漢字が修得されることも認めなくてはならないし、むしろそれを奨励しなくてはならないことはいうまでもない。

“山”ば“やま”と教えず最初から“山”と教える

このような漢字学習は、読みだけで修得される方法と、読み書き並行の学習とは、決して対立的ではなく、むしろ共同的相互補正的方法であることを理解しなくてはならない。

小学校における漢字学習が、読みによって促進されることと、これまでのような読み書き並行学習とは、当然、共同的に適当に学習され指導されなくてはならないが、国語学習において、特に漢字学習はだいじであり、かつむずかしいために、漢字の学習をかなの学習から切離して、できるだけ漢字数や漢語数を早く多く学習させて、漢字漢語のストックを多く持たせることが学力であるというようにきめこんでしまうことには疑問がある。

これまでも、漢字は書くことがむずかしいという立場から、書取りという学習法が盛んに行われた。そうして、漢字漢語に関するストックを豊富にしようとした。もちろん、そういうストックが豊富であることは貧弱にまさること万々である。しかし、そういう書取り練習を行っても、案外、作文力に対する影響が少ないということも注目されてきた。

これは書く漢字の問題であるが、読む漢字漢語のストックにも、これに似た現象がありはしないかと考えられるが、どうであろうか。ストックとしての漢字漢語は、それぞれ何らかの概念を表わしている。ところが、その漢字漢語が他の文字やことばと関係して、センテンスを形づくっていると、その漢字漢語はそれぞれ固有の概念を表わすとともに、そのセンテンスにおける文法的な位置と他の文字やことばとの関連によって、それぞれ特有な具体性を担ってくる。このことは漢字漢語にかぎらず、文字やことばの有するだいじな機能である。

漢字の学習は、読みと読み書き並行との共同学習でなくてはならないだけでなく、かなやかなことばとの総合によって表現されているセンテンスとして総合的に経験され、学習されなくてはならない。

近年、小学校入学の児童に対し、教科書中のかなことばを漢字になおして読ませる方法が行われているという。また、先生が話をしながら、実物のかわりに漢語の文字板を提示し、読みによる漢字を修得させることが行われているという。わたしはまだ見学していないから、かれこれ批判することはできないけれども、これは日本語を表記するための正書法（たとえば、「山」という語はいつでも「山」と漢字で書き、「挨拶」という語はいつでも「あいさつ」と平がなで書き、「ミルク」という語はいつでも「ミルク」と片かなで書くというような）が一定しておれば、それは有力な方法にちがいない。が、現在のように、かなでも書き、漢字でも書くというような習慣になっている場合には、漢字を知らなくてもかなでなら書けるという段階を経ないで漢字を教えることに急ぎすぎると、かえって、センテンスにおける漢字使用の的確さが失われることもありはしないかと思われるが、どうだろうか。（以下略）

以上、七枚に及ぶ論文は、“読み書き並行論”の正しさを主張するはずのものですが、「“読み”と、“読み書き並行”との共同学習でなくてはならない。」というようなことをいって誠に歯切れの悪い論文です。とりわけ最後の二枚などは、この論争に無関係な“口語文”完成の重要性を説いていて、一体、どこに“読み先習”の欠点が指摘されているのでしょう。

わずかに批判かと思われるのは、二枚めの初めくらいのところの「漢字が読めるだけではなく、書くこともできるというような学習を基礎にしなくては、漢字の一字一字を確実に認識することもできなければ、その漢字の機能を生かすこともできない。」と言っているところです。

しかし、“読み書き分離”を私が主張するのは、「これを同時に完成させようとすることに無理がある。読み先習にして、読みに十分に習熟さ

せることにより、字形にある程度の認識ができたところで書きを習熟させたほうが有効だ。」と考えるからであって、書く学習などしなくてよいとは言っていません。だから、これでは、“読み書き分離論”に対する反論にはなりません。

最もわからないのは、石井方式の基本原則である「社会で一般に漢字で書き表わしている言葉は、最初から漢字で提出し、指導すべきである。」という考えに対する意見です。「日本語を表記するための正書法が一定しておれば、それは有力な方法にちがいない。」と言って、しかし現在では「山」を「やま」とも書けるので、「漢字を知らなくてもかなでなら書けるという段階を経ないで漢字を教えることに急ぎすぎると、かえって、センテンスにおける漢字使用の的確さが失われることもありはしなかと思われる。」と言って、“かなから先に教える”ほうがよいとしていることです。

西尾氏もい「山」を常に「山」と書く正書法が一定しているなら、最初から「山」で教えるほうが有効だと認めているのです。ところで、わが国の社会では、「山」は「山」と書くのが普通で、「やま」と書くことはまずありません。もちろん、氏の指摘されるように、「やま」と書いても誤りではなく、そう書くこともあります。しかし、一般に、人々は「山」と書いているのですし、最初から「山」で教えるほうが有効だと認めていながら“急ぎすぎると……と思われる”という何だかはっきりしない理由で「“かな”から教えたほうがよいのではないか。」というこれまたはっきりしない意見を述べていらっしやいます。

つまり、漢字はむずかしいから、そして、かなで書いてもよいのだから、最初はかなで教えたほうがよい、ということのようですが、そういう考え方で、漢字を教え、漢字を学ばせたのでは、漢字が身につくはずがないではありませんか。

「山」を「山」と書くのが世の常識なら、「山」が書けるように導くのが教育というものではないでしょうか。「山」と書くほうがよいのだが、それはむずかしいから、また「やま」と書いても誤りではないのだから、と言って、「やま」から教える“甘やかし”教育では、「山」と書く能力は決して生まれません。

教育というものは、最初はきびしく、あとになるに従い、手を抜いていくべきものです。初めは、どんなにきびしくても、耐えやすいものです。そして、それに慣れれば決して苦痛ではありません。

元来、漢字はむずかしいものではありません。最初、かな書きに慣れさせて、それから漢字に移させるから、“移るのがむずかしい”ので

す。この甘やかし教育の犠牲者は、結局子供たちです。

これに対する大野晋氏の論文は、“読み先習、読み書き分離”の理由を明確に解いていますので、全文を紹介したいと思います。

読み先習論　　大野 晋

固定観念を打破れ

――読む力こそ生活に必要

私はまずこの議論が「教育の方法」上の議論であることをお断りしておきたい。しかしこの背後には、「文字の役割」に関する一つの見方が控えていて、戦後の文字政策についての一つの批判がこめられている。また、これは空疎な観念論ではなく、実践の結果を基礎としていることも最初に言っておきたい。

戦後の学生が、読み書きの能力において、著しく低い実力しか持っていないことは、すでに繰返し言われて米た。それは「定説」となっている。その状態は大学生において総合的に示されているがその途中の小学校・中学校でも明確に見られる事実である。たとえば、小・中学校の社会科、理科などの教科書が読めない結果、社会科、理科などの教師は、まず教科書の読みのために多くの時間を費やしている。

この状態をもたらした原因の一つには、漢字の学年配当なるものがある。小学一年生 46 字、二年生 105 字、三年生 187 字というように、各学年で学習する漢字の数が限定され、それ以外の漢字を教科書に提出することは制限され、学習が拒否されている。この漢字の配当表決定の基礎には、小学生の学習負担の軽減というううたい文句があり、学ぶ漢字はすべて書けなければならないという考え方がある。そして、小学生の卒業時に、書取りで書ける字数は五百字程度であるという戦前からの調査結果が参考にされている。

しかし、文字の機能について、われわれは考え直さなければならない点がありはしないか。というのは、言語生活で果す文字の機能は、書く面と読む面があり、文字は現代の社会生活では、むしろ読むものとして大きな役割を荷なっている。一日の言語生活を顧みるとき、新聞を読み、雑誌を読む。ほとんどの人々が現在、それに三十分から一時間をかけるだろう。

しかし、書く時間はどれほどあるかと見れば、職業的な文筆業者を除いた場合、個人個人は、手紙、日記、記録その他に、平均して読む時間の十分の一程度の時間しか費やしていないことに気づくであろう。ペンを持たない日のいかに多いことか。また、たとえ毎日ペンをとるとして

も、それは、ある特定の事項に関する繰返しが多い。それに反して、読む文字の範囲は、いかに広いことか。

戦後の国語教育は、読むこと、書くことだけが国語の教育ではないとして、話すこと、聞くことを大きな項目として取入れた。それはそれとして結構なことであるといえる。しかし、書くこと読むことに関しては、書ける文字と読める文字とを、はじめから一致させようとした。そして、漢字はむずかしい文字だとして、なるべく学ばせまいとして来た。だから、まずカナを教え、後にそれを漢字に翻字する。しかし、ここには誤った固定観念の支配がある。それを実験的に明示したのが、石井勲氏による、いわゆる石井方式である。

石井方式は「社会で漢字で書く言葉は最初から漢字で与えよ。子供には、漢字を読むことは、そんなに苦にはならないのだ。」という立場に立つ。そのことを、石井氏らは幼稚園児の教育で実践的に示したのである。

井上文克氏以下の人々を中心とする大阪の幼稚園で、二万人近くの園児がこの教育に加わっている。いたいけな三歳児たちが、先生の示す木札に書かれた、「電車」「飛行機」「自転車」「自動車」「汽船」という文字を一斉にデンシャ！ヒコーキ！ジテンシャ！と読むのを見た人々は、おのが目を疑うであろう。

また、「九」と「鳥」と「鳩」のうち、園児がもっとも確実に早く読めるようになるのは「鳩」という文字であり、「九」がこの中ではもっとも読める率の低い文字であることを聞いて、人々は意外の感に打たれざるを得ないだろう。これらは、すべて実験の結果であり、一年保育の終りに、幼稚園児が読める字数は、四、五百字が標準となることも明らかになっている。

この教育は、「漢字を詰込む」ために行われたものではない。一日に五分くらいしか漢字での教育には使われていない。ここでは、「漢字を教える」よりもむしろ、「漢字で教える」ことが目標である。

漢字かな交り文という表記の体系は、あまり漢字を減らしては成立しないものだ。その体系には、それなりに、ある程度の漢字の数が必要なのだ。それを組合わせて表記の体系を作り、また単語を造語して行くものなのである。だから、なるべく早く、ある程度の、おそらく数百字から千字程度の、文字が読めるようになる方がよい。それによって、社会科も理科も文章が読めるようになる。そして内容の理解へ直ちにはいって行ける。

今は、小学校低学年から、社会科だの何だのと、各教科が時間を分

取って使っている。しかし、教科書の読みの段階で苦労している。そこで、社会科や理科は、小学校低学年の国語科へ、自分の持ち時間を貸してやる方がいい。子供が低学年で今よりも多くの読み時間を持ち、読みに力を注ぐなら、漢字が今よりずっと多く読めるようになる。そうした上で、高学年で社会科、理科の持ち時間を返してもらえば、それぞれの学科は、早い豊かな理解と進歩を生徒に期待できるだろう。

大体、日本には、「漢文の素読」という学習の伝統があった。子供が漢字だけの文章を読むことを学習したのである。それによって文字を習得し、後にそれを書く段階へと進んでいった。戦後の漢字政策は、漢字を悪い文字と思い込ませ、なるべく学習させないようにすることを目ざしていた。そして、漢字の学習が大きな負担だとして来た。しかし、石井方式に基礎を置く「漢字の読み先習論」は、漢字学習に関する「読みと書取りの分離」を提唱し、豊富な識字の先行を求めるのである。

誤解を避けるために一言するが、これは決して漢字だけの教育を主張するものではない。話し方、聞き方の教育を否定するものでもない。漢字かな交り文を表記の正則とする限り、漢字の学習法は、常に基本から研究されるべきものである。「漢字の読み先習論」は、その一つの学習法として大きな意味を持つことを主張するにすぎないものである。ただし、その背後には、戦後の文字政策の底にある考え方に対して、批判的な思考を持ち、戦後の政策に対する単なる反対から脱却して、新しい有効な教育法を獲得しようとする一つの見解なのである。

以上が全文ですが、ついでに言いますと、この論文の初めと終わりで、「読み先習論は、教育の方法の問題であって、その背後には、戦後の文字政策についての批判が込められている」ことが指摘されています。私たちは、この戦後の文字政策というものを深く反省しなければならないと思います。